



○「事実は小説より奇なり」。こんなことが思うことが現実起きています！

# 九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.169

2011(平成23)年 8月 6日(土)発行

※「玉音」とは、天子や天皇の声のことをいう。ぎょくおん・ぎょくいん

「戦争と原発合せ語る夏」小高区 荒川 澄・横浜市にて(8月14日『朝日新聞・朝日俳壇』より)

●1945(昭和20)年8月6日8時15分、ヒロシマに原爆投下。●9日11時2分、ナガサキに原爆投下。●15日天皇の玉音放送、「第2次世界大戦・アジア太平洋戦争」終る。

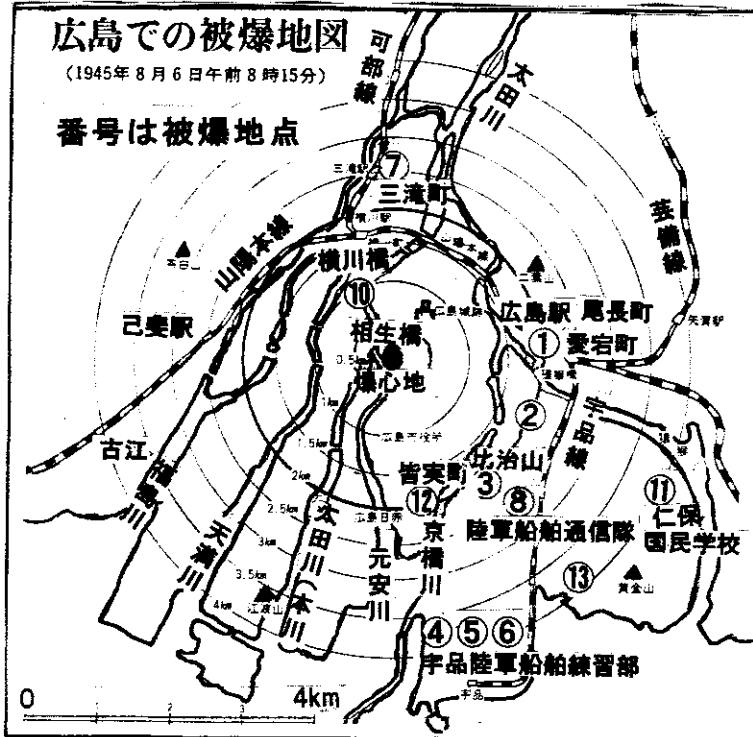
## ヒロシマ・ナガサキで被爆 66年後原発事故で再び被曝の危険が

《相双地区在住の被爆者は今、どんな思いで原発事故を見ているか》 前編



◆1945(昭和20)年8月6日・9日、ヒロシマとナガサキに原子爆弾が投下。その時被爆され相双地区在住の方が、ヒロシマで14名、ナガサキで6名おられます  
◆それから66年後の今年3月、東日本大震災で東京電力福島第一原子力発電所の甚大な人災事故で、今2度目の被曝の危険にさらされています。◆被爆者20名のうち、ご健在の方の様子を調べたり、直接お話を伺ってみました◆今号「ヒロシマの被爆者」と、次号「ナガサキの被爆者」の2回に分けて報告します。

### 相双地区の ヒロシマでの被爆者 14名の被爆状況と現在の様子は



①相馬市のY.Kさん(故人)は、広島市の東部の尾長町の通信隊から、トラック5台で市内中心部へ家屋取壊作業に向かっていた。愛宕町の踏切で貨物列車の通過を待っている時、B29のエノラゲイを目撃。その直後の8時15分に被爆。爆風で吹き飛ばされる。Kさんの前のトラック3台は全滅で踏切で止められたことで命びろいする。福島県で第1号の原爆症認定患者となる。

②双葉郡浪江町の花房三郎さん(故人)は、比治山の通信隊から猿猴橋の部隊長の官舎へ向かって歩いている時に被爆。爆風で吹き飛ばされる。きのご雲が美しく輝いて見えた。子供や孫への影響を心配していた。

③相馬郡新地町の飯土井鶴吉さん(故人)は、爆心地から1.8km地点の、皆実町の兵舎の3階で戦友と話している時に原爆が投下され、1階まで投げ出された。胸には「黄色い血」がついていたが、それは被爆の時話していた戦友の脳だった。

⑤原町区の高山南さんは、④の桑原さん、⑥の中川さんと同じ宇品の部隊にいて兵営内の広場で被爆し20名も吹き飛ばされる。無事だったので死体の片付け作業に従事させられた。

④南相馬市原町区の桑原馨さん(故人)は、宇品船舶練習部の教官で、朝礼の8時15分、兵舎の陰にいたため無傷ですむ。「水をください」という女学生の声忘れられない。

⑥鹿島区の中川善久さん(故人)も、④⑤と同じ宇品の部隊で被爆。講堂でモールス信号の練習中に被爆し、爆風が頭の上を吹き抜けただけで助かる。「オレたちは地獄の鬼のようだ」と言い合って、たくさんの死体の焼却作業に従事する。終戦直後、麻酔なしで盲腸の手術を受け、薬品もない中で奇跡的に回復。⑤の高山さんの手助で、命からがら鹿島区烏崎の実家に復員する。



桑原さんが自ら描いた「軍隊の庭で死者を焼く状況」。一回に三、四十人を並べて焼き、次の日には、その上にまた並べて焼いたそうです。

目に見えぬものに奪われて暮らして  
放射能の町離れ来てみどり立つ  
ふるさとを詠んだ俳句集を手に遠藤  
さんと奥様。相模原市にて。  
(写真は五月二十日『中国新聞』より)



は違っても安全だと信じてきた。腹立たしい「被爆者で放射能の怖さはよく知っていて、まさか2度も放射能におびやかされるとは」と話されています。(5/20『中国新聞』、7/30『朝日新聞』掲載)

⑦小高区の遠藤昌弘さんは20歳で広島市の三滝町の陸軍病院に入院中、眠っていた時に被爆し、爆風で廊下の壁に吹き飛ばされる。夕立のように降った「黒い雨」にうたれ茫然としていた。被爆から50年後の2005年に、初めて被爆者手帳を申請し交付された。(本会報No.30に掲載)

今年85歳。小高区の自宅は原発から20\*。圏内で警戒区域にある。震災の翌12日、広島での「黒い雨」を思い出しながら避難。奥様と娘さんと3人で避難所の体育館に3泊、福島市の親類宅に一週間、その後神奈川県相模原市の知人宅に避難されています。

小高町役場職員として、浪江・小高の新規原発建設の周辺道路用地買収に関わったことから、「原爆と、平和産業の原発

⑧鹿島区大内の岡実さんは19歳で、③飯土井さんと同じ、比治山の南にあった船舶通信隊の兵舎で仮眠中に被爆。兵舎は棟も落ちるほど破壊されたが、ベッドの下に入り込んで助かる。死者の搬送や、「兵隊さん助けて」「水をください」という負傷者の救出を行う。戦後1年間ほど倦怠感があつたが、ほぼ健康でよき家庭に恵まれた。(本会報No.140に掲載)



今年85歳で孫7人、ひ孫さんも生まれ、親子で酪農を営んでいた。海岸から近い高台の自宅は大津波では難を免れたが、牛の飲料水の確保が出来なくなり、放射性物質のあおりで牛乳を捨てることになる。3日後には牛60頭を山形の業者に引き取ってもらう。山形県河北町に一時避難したが、4月初めに自宅に戻る。その後、「2度目の被曝」の取材をめざす新聞社やテレビ局、映画会社が次々に訪問するが、家族も取材に協力されていたということです。

「この年でこんな目にあうとは。牛乳を捨てるなど夢にも思わなかった」「原爆も原発も同じものだ。何が起きても止められないとだめだっぺ」「原発がだめなら、それに代わるエネルギーを探さなければならない」ときっぱりと話しておられます。(4月20日『毎日新聞』など参照)

⑨双葉郡大熊町の池田中さんは双葉町生まれ。当時20歳で、広島県東部の三原市に通信兵としていたが、救援のため、原爆投下の翌7日の朝、広島市に入り(入市被爆)、一週間、素手で死体を担架に乗せて運んだりした。

原発の町・大熊町に住んでいたが、事故後、秋田県にかほ市に避難。被爆者とは教えていなかったが、息子さんは原発関連会社に就職し、複雑な思いでいた。「核の怖さは知っていた。原発はあの原爆と同じ技術だ。心の中では危ないと感じていた」、「平和利用という言葉に踊らされていた。情けねえ」と話しています。今年85歳。

(写真:一緒に避難した愛犬とともに池田さん。7月14日『中国新聞』より転載)



⑩相馬市のK. Kさんは24歳。爆心地から1\*の横川町の部隊にいて(相双地区の20名中、最も近い)、兵舎内に足を入れてすぐに被爆した。屋外だったら即死だったろうと語る。意識を失ったKさんを誰かが安全な横川橋近くの川原に運んでくれて助かったが、同僚のほとんどは死んだという。

今年90歳ですが、7月22日に10年ぶりに相馬市内のご自宅を訪ねてみると、「7月初めに入院して、もう意識がなくて・・・」と、奥様が沈痛な面持ちで話しておられました。ご回復を祈念しております。

⑪相馬市のT. Wさん(故人)は30歳の無線兵で、3.5\*。兵舎になっていた仁保国民学校で被爆する。

⑫相馬市のS. Sさんは、18歳の通信兵として2\*。地点の路上で被爆するが、建物の陰で助かる。しかしやがて、娘さんの縁談が「被爆者の子」という理由で何度も断られてしまう。

⑬相馬市のS. Mさんは当時23歳。丹那の部隊で体操をしている時に被爆するが、腕立て伏せの体勢で無傷ですむ。2週間前、「京都へ避難せよ」というアメリカの宣伝ビラを見ている。

⑭原町区のY. Dさん(故人)は13歳の時、朝鮮にいて直接被爆はしていない。故郷の広島二中生の時、校庭に麦を蒔き、その生育の良いところに被爆者たちの遺骨が埋められていて、掘り起こした。